

2010年度私立大学図書館協会「海外認定研修」報告書

所 属 関西学院大学図書館

職 名 運営課長

氏 名 今村 太朗

1. 調査・研修テーマ：図書館事情報告（北京大学・清華大学）

中国の重点大学である北京大学図書館と清華大学図書館について、建物・施設を調査し、各種サービスや電子資料の提供等について学ぶ機会を得た。

2. スケジュール：8月26日（木）～27日（金）

8月16日	出国（関西国際空港）	北京（北京首都国際空港）
17日	大連市	
20日	吉林市	
26日	北京大学図書館	
27日	清華大学図書館	
29日	北京（北京首都国際空港）	帰国（関西国際空港）

3. 調査・研修の概要

(1)北京大学図書館（14:00～17:00、館内見学、図書館概要説明）

詳細は別紙参照。

(2)清華大学図書館（10:00～13:00、館内見学、図書館概要説明）

詳細は別紙参照。

以 上

別 紙

北京大学と清華大学の図書館を訪ねて

はじめに

2010年8月16日から29日まで中国に旅行する機会があり、北京、大連、吉林を巡ってきた。昔から興味があった中国の大学図書館を見学しようと思い、文理系として中国でのランキングがトップである北京大学の図書館と理系・科学技術系として同じくトップである清華大学の図書館を見学しようと考えた。ともに中国教育部の直属重点大学である。しかし、これまでに見学した経験のあるアメリカやカナダの図書館と異なり、まったく初めての中国の大学図書館へどのようにアプローチすればよいのかを考え、昔大学からトロント大学へ研修で派遣された時、丸善さんにお世話になったことを思い出し、旧知の教育学術事業本部の井出武志氏に相談したところ、見学の手配をお引き受けいただいた。井出氏から品川にある方正株式会社をご紹介いただき、二つの図書館見学をスムーズに行うことができた。

この方正株式会社の親会社である方正集団は「北大方正集团公司」が正式社名であり、北京大学が100%出資し、大学の研究成果を産業化するため1986年に設立され、その後、方正控股有限公司(香港)、方正科技(上海)と関連会社・子会社を増やし、1996年には東京に方正株式会社を設立した。アジア各地の総従業員数は約3万人で、本来はパソコンなどのハードを製造する企業であったが、最近ではソフトウェアおよびデジタル資料に注力している中国でも屈指のIT企業である。

(<http://www.founder.com/>)

私が中国各地を旅行していたため、見学予定日だけを方正集団の姚(Yao)氏と打合わせ、具体的なスケジュール等は北京で電話連絡することになった。北京大学と清華大学は北京北西部の海淀区にあり、近くには北京の「シリコンバレー」とも「秋葉原」ともいわれる中关村がある。方正集団をはじめ、百度(Baidu)等のオフィスビルも近くにあった。

・北京大学

8月26日の14:00に北京大学の東門で方正集団の張煜さん(Ms. Zhang Yu 北京大学卒)と待ち合わせて、方正のIDカードで難なくキャンパス内に入ることができた。周りを見ると何組もの親子らしき集団がキャンパス内を見学している。張さんによると、「あれは中国各地から北京大学を見学に来ている人たちで、子供たちに将来は北京大学に入れるよう頑張るよう言い聞かせているのです。」とのことであった。子供が北京大学へ入ることは教育熱心な中国の親たちには大きな目標なのである。さらに10月からの新入生の集団が何組も学内をツアーしているため、キャンパスは大変な混雑であった。



(北京大学図書館)

北京大学は、1898年に創立、当初は「京

師大学堂」という名称であった。43 学部、学生数約 37,000 名を擁し、教員数が 3,000 名を超える総合大学で、敷地面積は 270 万平米という広大なキャンパスである。東門から西端の校地まで地下鉄の駅が 2 つ入るぐらいの距離がある。

・ 北京大学図書館

北京大学図書館は、1902 年に創設された「京師大学堂蔵書楼」を前身とする図書館である。辛亥革命後の 1912 年に国立北京大学図書館と改称され、現在に至っている。北京大学は五四運動の出発点であり、マルクス主義思想が中国で初めて広まった場所で、中国共産党が最初に活動を開始した大学でもある。1950 年の全国的な大学再編により、北京大学は文理系の基礎教学と研究を中心とする総合大学となり、多くの人材を輩出している。北京大学は近隣にある清華大学と並んで入試の最難関大学である。張さんによるとこの 2 大学だけは他の大学と比較できないぐらいの難関であるという。

北京大学図書館は約 700 万冊を越える蔵書数を誇り、古文書も 150 万冊を数える。その中の 20 万冊は 5 世紀から 18 世紀にかけての貴重な文献であり、中国の文化遺産である。アジア最大規模の大学図書館といえる。図書館前で方正集團の刘众さん (Mr. John Liu 北京大学卒) が見学許可申請書を持参してくれていた。図書館入口左側の受付でパスポートを預け、IC カードを発行してもらった。(入館料が必要であった。) この IC カードは方正集團が北京の地下鉄用に供給しているのと同じ種類のカードである。えーっ、パスポートを預けるのかと思ったが、郷に入れば郷に従わざるを得ない。

- 1 . 建物・施設

建物内部全体に大理石が多用されており、豪華な造りとなっている。エントランスに地下鉄の改札のようなゲートがあり、発行された IC カードで入館した。まっすぐ進むと大きな吹き抜けのある大きな陽当たりのよいフロアに出る。



(図書検索フロア)

ここにある端末を利用してオンライン目録、データベース、電子ジャーナル、e-Book などを利用することができる。実際のオンライン検索やデジタルコンテンツの利用について北京大学大学院在籍中の何俊妮さんから説明していただいた。外部来館者の利用は 1 時間 5 元である。このフロアの上部には吹き抜けを取り巻くように閲覧席が配置されている。さらにその奥には多くの施設が「部屋」のように配置されていた。各階の通路には北京大学教員の写真と紹介が展示されており、各教員からの「おすすめの本」も掲載されていた。館内のサイン類は天井から吊り下げる木製のもので、文字が小さくてわかりにくく、初めての来館者には極めて不親切なものであったが、日常的に自分の居場所がわかっている学生にはこういう簡単なサインで十分と考えているようだ。館内の主要な施設として、以下のものがある。(施設名の表記については、わかりやすくするため、中国語表

記を使用していない部分がある。)

1 階

インターネット、オンライン端末検索フロア
閉架書庫借書処およびカード目録（老北大書名目録、燕大書名目録等）
コピー室
インターライブラリーローン・カウンター
レファレンスデスク
古籍（貴重図書）閲覧室
工具書（レファレンスブック）閲覧室
館長室、副館長室
CALIS 管理センター
総務課、会計室
目録部、受入部、雑誌・電子情報受入部
貴賓室、会議室

2 階

文学図書借閲処
保存本閲覧室
人文社科図書借閲区[近 10 - 15 年]
多媒体学習中心(メディアラーニングセンター)
多媒体資源部(メディアセンターオフィス)
学術討論室(セミナールーム)
中国図書館学会高校図書館分会秘書処(CSLS)
李羨林工作室(Ji Xianlin Collection)
流通閲覧部オフィス
読者サービス部(ブックショップ)

3 階

自習室(スタディ・エリア)
ユーザー培训中心(ユーザートレーニングセンター)
数字加工部(デジタル化センター)

教学参考書(リザーブブック)閲覧室
学位論文閲覧室
北京大学文庫
特蔵閲覧室・オフィス
北京大学欧州資料中心
地方志(ローカル・クロニクルズ)閲覧室
新書閲覧室(New Books)
教育部高等学校図書情報工作指導委員会秘書処
科技図書借閲区[近 10 - 15 年]
大学図書館学報編集部



(中央部の閲覧座席)

- 2 . CALIS

中国高等教育文献保障系統(China Academic Library & Information System)は、中国の教育部が 21 世紀に向けて 100 の大学を重点的に発展させる施策である「211 工程」のプロジェクトとして 1998 年に組織したものである。目的はリソース・シェアリングであり、冊子と電子を問わず、以下のサービスを提供している。

総合目録データベース

ILL とドキュメントデリバリー

ヴァーチャルレファレンスシステム

電子リソースのコンソーシアム契約

デジタルライブラリー

各種研修

CALIS は、日本における NII と国公私各図書館協会が一緒になったような組織である。この CALIS 管理センター (CALIS 中心) が北京大学図書館にある。後で述べる清華大学図書館は 4 つある全国センターの一つであり、工学を担当している。参加館は総合目録にデータを登録すれば報酬がもらえ、ダウンロードすれば費用が発生するという点では OCLC に近いと考えられる。(<http://www.calis.edu.cn/>)

- 3 . 収集と電子資料

北京大学の収集は主題別に必要なものを選定することが原則であり、図書資料収集は印刷媒体を中心に、雑誌資料収集は電子媒体を中心に切り分けられていた。電子資料の契約は数十から数百の大学がグループとなって出版社と交渉・契約する。このコンソーシアムの代表が上記の CALIS である。

また、電子資料の充実とともに自館の所蔵資料の電子化が進められていた。善本、拓本、地方志、地図、写真などの貴重資料や中華民国期(1912~49年)の図書や雑誌などが中心である。機関リポジトリとしては、大学の著名な研究者である「李政道数字図書館」というサイトを構築していた。これは 1957 年にノーベル物理学賞を受賞した李政道の著書、資料、論文や写真などを公開しているサイトである。広大な国土に情報を行き渡らせるための IT 技術やインターネットを駆使した工夫がなされていた。

- 4 . 分類と目録業務

分類は、中国図書館図書分類法 (CLC : Chinese Library Classification) が使われている。CLC についての詳細は、『中国図書館図書分類法：中日対訳』(中国図書館図書分類法編集委員会編、近野中国語研究所刊、1983 - 1989) を参照されたい。閲覧室で図書を手にとって確認したが、貸出管理用のバーコードが図書に貼付され、あとはタトルテープ、蔵書印と分類記号ラベルという簡単な装備である。書誌フォーマットは中文を含めた和資料で CNMARC を、洋資料で MARC21 を使用していた。文字コードは UNICODE であった。目録規則は CALIS Chinese Descriptive Cataloging Rules が採用されている。大学図書館界では CALIS 公共目録検索システムが利用されている。北京大学は清華大学とは異なり、OCLC には中国語書誌データを提供していないが、百度 (Baidu) に書誌データを提供している。百度の CEO が北京大学卒であるという縁によるものであるらしい。

- 5 . 蔵書管理

北京大学図書館では定期的な蔵書点検を毎年実施している。財産管理上の必要性からではなく、現物を確認して不明な図書を確認することで利用サービスをよりスムーズに行うことが目的である。蔵書量を考えると大変な労力であろうが、国家の図書であると考えたとさもありななと思われた。なお、RFID の導入は「中国国家図書館」においては進んでいるようであったが、北京大学図書館では、IC チップの耐用年数の問題があり、まだ実施されていなかった。

大学図書館見学の後、キャンパス内にある湖 (未名湖) の周り と北京大学のシンボルである博雅塔を中心に案内してい

ただいた。キャンパスがあまりにも広くて次の授業への移動には自転車が必要で間に合わない。北京大学は清朝第四代皇帝であった康熙帝によって造られ、アロー号事件によって焼かれた円明園の跡地に建っている。北京大学はこの広大なキャンパスの一部を北京の企業や教育機関などに貸しているため、この収益が大学の運営を支えている。いわゆる「お金持ちの大学」である。北京の地価をオリンピック前後で比較すると現在は約 6 倍になっているとのことであった。



(博雅塔)

この後、方正集団の Apabi 社で製品部の夏磊平さんから電子図書館システムの説明を受けた。方正集団のデジタル出版は E-Book200 万種、新聞 2,000 種、年鑑 2,000 種、写真(歴史的写真) 50 万枚にのぼる。その際にデジタル資料の貸出を行うシステムについて話を聞いた。iPhone 等の携帯端末にダウンロードすることでデジタル資料を貸し出すのだが、

1 コピーの場合、貸出中であれば貸出不可となり、10 コピー購入していれば 10 冊貸出が可能になる。貸出期間と冊数は各図書館で決めることができる。ここまでは紙の図書と同じなのであるが、貸出期間を 2 週間と設定し、その 2 週間が経過すれば、借り出したデータすべてを閲覧できなくなるという点がこれまでと大きく違う点である。従って督促業務は必要ない。Apabi 社が開発した電子書籍フォーマットは CEBX 技術と呼ばれ、中国の電子書籍市場において約 8 割という大きなシェアを持っている。また、デジタル著作権管理に用いる DRM(Digital Rights Management) 技術、利用や複製を制御・制限する技術について説明を受けた。さらに中国語コンテンツの日本での利用の現状について懇談し、1 日目が終了した。

・清華大学

8 月 27 日の 10:00 に張さん、劉さんと清華大学西門で待ち合わせた。方正集団の清華大学卒業者が出張していたため、お二人が代わりに来てくれた。清華大学は北京大学から少し北上した場所にあり、こちらも広大なキャンパスであった。学内には清華大学教職員の家族も生活しており、キャンパス内は道路が整備され、店舗も多数見受けられた。清華大学では入構する際のチェックが特に厳しくなっていたため、劉さんに私の入構許可証を作成していただき提示した。これは図書館でも役に立った。

清華大学は 1911 年に創設された清華学堂(建物は老朽化のため現在修復中)を前身としている。14 学部、55 学科、学生数約 31,000 名を擁し、教員数が約 7,000 名を越える大学で、敷地面積は北京大学より小さい 196 万平米の広さを持つ大学である。実際の存在が不明な東門まで約

20kmもあるようで、歩くと5時間ぐらいかかる計算である。1950年の全国的な大学再編により、清華大学は理系を中心とした大学となり、改革解放後に文系学部を復活させたという経緯がある。現在も中国のMITと言われるほどで理系に強い大学である。胡錦涛現国家主席、習近平現国家副主席、朱鎔基元首相などが大学の出身者である。

・清華大学図書館

図書館に到着するまで徒歩で20分以上かかったが、途中には池、川、グラウンド、公園、並木道などがあり、広大なキャンパスの一部を見ることができた。清華学堂が創設された1年後の1912年に作られたのが「清華学校図書室」で、これが図書館の前身である。



(清華大学図書館玄関)

現在の清華大学図書館は2万8千平米、座席数2,800席、蔵書370万冊を誇る。この図書館は増築を重ねて大きくなった

ため、その全景を把握しにくい形状になっている。そのため、エントランスには増築の過程を見せるための建築模型が設置されていた。更に新しい図書館棟が建設中であった。

- 1. 建物・施設

図書館の入口に事務所があり、入構許可証を見せ、パスポートを預けて入館した。エントランスから中央階段を上るとそこにはオンライン端末が配置され、学生が立ったままで検索していた。



(図書検索フロア)

エントランスの横には応接セットのような座席があり、新着図書がワゴンに乗せられて置かれている。そこで学生が自由に閲覧していた。北京大学もそうであったが、新着図書の提供について図書館は特に気がつかっている。

この図書館は地上5層の建物で中央部に大きな吹き抜けがある。北京大学と同じくアメリカやカナダの図書館建築と同じコンセプトで作られたと思える開放感のある図書館であった。全体的に大理石を多用している豪華な造りとなっている。北京大学図書館との違いは階段が吹き抜けの内部に張り出すように設けられていることで、上層へ向かう階段から下を見ると結構な高さを感じる。各閲覧室や書

庫への通路は吹き抜けが眺められる張り出しにキャレルが置かれているため、多人数の閲覧は無理でやや狭いという印象を受けた。天井はドーム式ではないが、自然光を取り入れる仕組みになっている。館内の主要な施設として、以下のものがある。(施設名の表記については、わかりやすくするため、中国語表記を使用していない部分がある。)

1 階

インターネット、オンライン端末検索フロア
貸出返却カウンター
中文新書閲覧室
中文人文社科圖書借閱区
古籍閲覧室
流通閲覧部オフィス
総務部
科学技術史文献研究所

2 階

外文圖書借閱区
外文新書閲覧室
CALIS 全国工程文献中心
図書館オフィス
中文科技圖書借閱区
清華大学外国教材中心
党委・人事オフィス

3 階

多媒体製作サービス
コピー室
現刊及報紙(カレント雑誌及び新聞)閲覧室
工具書閲覧室
外文製本雑誌閲覧区
陳列室
会議室

4 階

SHUHUA 資源数字化中心
中国データベース検索サービス
グループスタディ

本校学位論文閲覧室
中文製本雑誌閲覧区
培訓(ユーザー教育)教室

5 階

XIANZHI 数字化中心(デジタル化センター)
数字(デジタル)図書館研究室
科技查新工作站(ノベルティサーチ)
参考部オフィス
学科館員(サブジェクトライブラリアン)オフィス



(1階閲覧座席)

- 2 . 機関リポジトリ

清華大学図書館では、学生の優秀なレポート、卒業論文などの教育研究成果の公開を目的として「清華大学学生優秀作品データベース」というDSpaceを使ったりリポジトリが構築されていた。この図書館は学生へのサービスが細やかで充実している。また、機関リポジトリとは別に、学位論文提出システムがあり、学位申請者がWeb

サイトからタイトル、著者名、キーワード、全文公開許諾の可否などの学位論文に必要な事項を入力して、論文ファイルとともにサーバ上にアップできるシステムがあった。北京大学でも同様のシステムが使用されていた。

- 3 . サブジェクトライブラリアン

清華大学ではサブジェクトライブラリアン制度を導入し、これを第一線の研究者が担当していた。図書館が導入しているデータベース利用について、研究者は自己の関連分野を担当している。清華大学でも北京大学と同じく、電子資料を収集することが最重要であると考えていた。そのため、図書費の約 6 割以上が電子資料の収集に充てられていた。サブジェクトライブラリアンは、データベースを管理するだけでなく、利用者へのデータベース紹介なども行い、電子資料の利用促進をはかっている。さらに「査新」(科技査新工作)という研究の新規性を調査するサービスを実施している。これは図書館に来館した研究者の研究内容やアイデアの新規性を調査し、その結果を報告書にまとめて提供する有料のサービスである。

. おわりに

中国を代表する2つの図書館を訪問し、中国における教育の充実ぶりを肌で感じ、図書館の目録法や分類法について学ぶことができた。国家による高等教育政策が展開することによる教育現場の厳しさを感じながら、日本の場合を考えると、逆にうらやましいと思ってしまった。現在の中国発展の原動力には国家のしっかりした「教育政策」が存在している。日本の大学、その中でも私立大学は補助金や予算を次々と削られて、各大学ともやり

たくてもできないことが山積し、切り詰められた財源や労働力を大学運営や図書館のサービス向上にどのように振り向けるのかを考えなければならない。例えば、大学図書館における近年の冊子資料から電子資料への媒体変更などは時代の流れであり、これらの情報インフラ整備は、今後の日本を発展させるために必要不可欠なものであり、国家がその存立をかけて進めていく必要があると考える。

また、現在の日本で顕在化している大学生の学力低下、教員の教育力低下などは、競争の激しい中国では全く存在しない。幼稚園や小学校など幼少期からの教育制度や学べる環境の充実ぶりは日本など足元にも及ばない。中国には学生生徒は国家の財産という考え方がある。大学入試が熾烈なだけでなく、卒業までずっと学生は学び続け、より高みをめざす。日本の学生は、中国や韓国など隣国の学生と対等に競争していきだけの力が身につけているのかを自ら確認し、もっと幅広く懸命に勉強しなければならないことに気づいてほしいと思った。これは大学図書館に勤務する私にもいえることであり、今回の図書館見学調査は、いつの間にか「隣国に差をつけられている現実」を認識するよい機会になった。

今回の見学調査を快くお引き受けくださった丸善株式会社の井出さんと方正株式会社の皆さん、北京でお世話になった方正集団の姚さん、張さん、劉さん、夏さん、北京大学の何さんに心より感謝申し上げます。

関西学院大学図書館運営課

今村 太郎